



私のいない
ベッドに
野崎あや

講談社



私のいないベッドに

野崎あや

私のいないベッドに

昭和五十八年八月十日 第一刷発行

昭和五十八年九月九日 第二刷発行

著者 野崎あや

発行者 加藤勝久

野崎あや

昭和三十四年十月、

昭和五十七年早稲田

科卒業。本名佐々木

屋在住。

株式会社講談社

京区音羽二―二―二／郵便番号一一二

(〇三)九四五―二二(大代表)振替東京八一三九三〇

豊国印刷株式会社

株式会社黒岩大光堂

八八〇円

乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りくだ
料小社負担にてお取り替えます。
Nozaki 1983, Printed in Japan

目次

私のいないベッドに

華燭

装丁 装画

熊谷博人 山城隆一

私の
いない
ベッド
に

肌にびったりと吸いつくビニールの手袋をはめた指が、性器の奥に突き立てられる。吐き気が胸元までこみあげて来て、天井の黄色い染みが目の中で滲む。金属音と共に丸く削られた器具が膣を滑り、子宮に達する。冷たさと、スプーンを思いきり噛んでしまった時のような不快感が全身を貫き、私は目蓋の裏が蒼くなるほど強く目を閉じる。汗が腋を伝う。まつげのカーラーのような器具が銀色に光りながら私の中で一回転する。さらに一回転。そしていきなり私は皮膚の内側をさらけ出している。子供の頃いたずらっ子が目蓋を裏返して見せたそれと同じように、私は性器から裏返されて、紅い肉となる。容赦なくめくり上げられたスカートの下端をさぐっていた手が、下腹の脂肪にめり込む。鋭い痛みが太股の静脈を走り抜け、思わずうめき声をあ

げた私の手を看護婦が握り返す。

「まだ何もしていませんよ。診てるだけですからね。これから注射しますから、少しがまんして」

鈍い麻酔針が突き立てられる。金属はすでに体温と同じぬくもりを持ち、私を押し拡げていく。下半身を這う器具の感触だけが反響している。麻酔によって痛みは減るところか、ますます激しくなっていく。天井に光を反射させて器具が動いたびに、舌が喉の奥に巻き込まれそうになり、体中に冷たい汗が流れる。腰にあてがわれたU字型のマットの下にあいた銀色の穴へと、肉塊が次々に落ちていく。

「もう半分済みましたからね」

と、看護婦の声。医者が小声で何かを言う。白い幕で区切られ、胴体から切断された下半身は、恥知らずな姿を陽にさらし、弄ばれるままに脈打っている。やがて、消毒液と綿のかたまりが投げ込まれる。

「腰を上げて」

声と共に、ついさつき自分で脱いだ下着が、白い指で着せられる。震える足で、階

段を下り、靴をはく。子宮から滲み出る血液が、下腹に詰め込まれた脱脂綿に吸い込まれていく。鈍い痛みを覚えながら私は隣室の、消毒液の臭いが染みついた固いベッドに横たわり、目を閉じた。

どれくらいたったのだろうか。幻聴のようなうめき声と器具の鳴る音、看護婦の声が耳に届く。白々とした光の中に投げ出された女の細い足首が一瞬浮かび、すぐに遠ざかっていった。

おぼろな意識の中に声が響く。

「今日は何食べようか。早くしてよ」

「ちよっと待って、今すぐ行くから」

「早くしないと、食堂いっぱいになっちゃうわよ」

肩をたたかれて私はうつろに目を開ける。

「痛みは？」

ベッドの周囲に引かれたカーテンの隙間から、看護婦が私の顔をのぞき込んでいる。血圧を測られながら、もう二時間たったのかと、ぼんやりした頭で考える。細々

とした注意を受けて病室を出ると、はち切れそうな腹を抱えた女が、待合室の長椅子に掛けて私を見る。

病院を出ると、陽は真上にあった。私は目まいがするほどの空腹を感じながら電車に乗る。駅の改札はいつも通り鉄を鳴らし、私の手にある長方形の紙片に切り込みを入れた。雑踏。通勤時間でもないのに、都会の電車には人があふれている。

「電車に乗って座れないなんて信じられない」と言った田舎の母の顔が脳裏をかすめる。

三つの駅をやり過ごし、見慣れた、しかし今朝とは明らかに違う顔をした駅に降り立つ。白くまぶしい太陽に照らし出され、そそけた顔をあらわにした私は、自分の影を踏みながら坂を登り、部屋にたどり着く。湯をわかしながら、消毒の臭いと冷や汗にまみれた服をバジャマに着替える。寝乱れたままのベッドに腰掛けて、カップラーメンをすすする。一口含んだとたん吐き気をもよおしたが、食べなければ永遠にこの状態から抜け出せない、という妙な強迫観念にとらわれて、最後の一筋までたいたげる。しばらくして、与えられた薬を飲み、西陽の中で私は浅い眠りに落ちた。

目覚めるとあたりは暗い。私はとまどった目を枕元の時計に向ける。暗さに慣れた目が文字盤を読みとるのとはほぼ同時に、感覚の戻り始めた耳が隣の部屋の水音や話し声、廊下を歩く足音などを聞きとる。上体を起こして蛍光灯のスイッチを引くと、一瞬、瞳孔が縮みあがる。透明なゼリーのように私をとりまいている空氣に亀裂を入れる。私は再び湯をわかし、買い込んでおいたカップラーメンをすすする。幾種類もの薬を手の平に出し、一口に飲み込む。

私はじつとりと汗ばんで目覚めた。八時半。世の中はとうに動き出している時刻だ。向かいの家からは小学生を送り出す声が聞こえてくる。頭の芯に、溶けきらない薬の澱が固まっているような気がして、舌がざらつく。それでも、とにかく何かを食べて薬を飲まなくてはならない。食パンを取り出すと、一面に青黴が生えていた。パンの包みをテーブルの上に放り出し、冷蔵庫を開ける。缶詰を開け、牛乳を飲む。薬を流し込み、テレビのスイッチを入れて再びベッドに横たわると、晴れやかな顔をした司会者が現われた。朝のおしゃべり、すがすがしい歌、奥様向けのコマージュ

ル。

次の日も、その次の日も、私はただ義務的に食物を口にし、薬を飲み、うつうつとまどろんでいた。昼も夜もなくベッドに横たわり、夢ともうつともつかない意識の底をさまよっていた。

一週間めの朝、私は時計のベルで目覚めた。眠さはなく、すぐに手を伸ばして目覚ましのスイッチを切る。天井を見上げ、もう何日も煙草を吸っていないことに気づく。蒼く立ち昇る煙の筋を想い描いたところで私は立ち上がり、萎えただるい手足でバジャマを脱ぎ、ブラウスとスカートを着る。湯をわかして丁寧に顔を洗い、歯を磨く。鏡の中の黄色くやつれた顔に化粧水をつけ、白緑色のクリームを延ばす。ファンデーションを塗り、一週間前と同様、濃くアイシャドーをつけ、頬紅とルージュを強く引く。診察券をバッグに入れ、ストックキングをはくと、私はドアに鍵を掛けた。

その日、医者にもう普通に生活して良いと言われた私は、夜になってから銭湯へ行
った。洗い場を飛び回る子供、胸のふくらみかけた小学生、水着の跡をくつきりとつ
けた女、下腹のたるみを堂々とさらしている中年女。あらゆる部分の肉がそげ落ち
て、尻の隙間から陰毛もまばらな性器を丸出しにした老婆。人々のたてる騒音の中
で、黙々と一週間分の——そして、それ以前からの——汚れを落とそうとやっきにな
っている私。

洗っても洗っても消毒の臭いがとれないような気がして、私は思わず手に力を込め
る。力を込めたとなん、股間に血がしたり落ちそうな気がして、はっと手を緩め
る。そんなことを繰り返したあげく、脱衣場の鏡に横向きの姿を映してみる。頭から
血の気が引いていく。私は、手早く身づくろいすると、外に出た。

外はひんやりとしているけれど、自動販売機でビールを買う。何十日ぶりのアル
コールだ。好きなはずの酒に吐き気を催すようになってから初めてのビール。一口飲
んだとたん、酔いが急激に回り、すっかり弱くなっている自分に驚く。

性生活解禁の十四日め、私は自慰をした。浩へのあてつけのつもりだったけれど、

それは失敗に終わった。浩の体や、赤黒い性器を想い浮かべてみる。けれど、いつの間にか指は金属と化し、容赦なく私をおし開こうとしている。ビニールのシートにへばりつく汗が首筋から背中、背中から脚のつけ根へ——それは、男の愛撫のたどる道筋でもあった——そして奈落の底へと伝わり落ちて行く。

数日後、私は薄暗いビルの小さなドアの前に立っていた。手術の費用のために、生活費はもう底をついていた。アルバイト紹介所でやっと見つけた、小さな雑誌社での校正の仕事だった。しばらく学校へは行けないが、今はただお金がほしかった。つまらない講義を聞くために、いや、自分の性欲の代償に、みじめな暮らしを強いられるのはがまんができなかった。かといって、浩に金を出させるのもいやだった。自分の性欲には自分で片をつけるしかないのだ。

薄汚ないスチールのドアをノックし、ノブを回す。

「失礼します」

そう言つて中に踏み込むと、人々の視線が一斉に集まる。それ以上積み上げようがないほど高く積まれた本や原稿の奥から、髭をたくわえた細身の男が立ち上がり、こちらにやって来た。その男は思つていたよりも若い。少しハスキーな声で言う。

「編集長の高野です」

氣を取り直してゆつくりと室内を見回すと、ずいぶんたくさんの視線を受けたように思ったが、総勢八人だった。二つつかないだしの片隅の椅子を与えられ、私はそこに掛ける。とにかく校了までの一週間、与えられた仕事をこなさねえれば——こなさなくとも、時給千円で雇われた私には関係ないが——四万何がしかの現金が転がり込んでくるのだ。高野はすぐ、私の前にゲラ刷りを積み上げた。乱雑な机の片隅に押しやられたペン立てから赤いボールペンを取ると、私はゲラに目を通し始める。科学の時間に習ったオームに似た記号や、アルファベットのSに似た記号、フタの尻尾、波線、そして辞書を片手に誤字を調べていく作業に没頭していると、すぐ昼になった。昼も夜もなくうつうつとしていた日々とは何という違いだろう。紅一点の、三十近い

と思われる女が尋ねる。

「何を食べる？」

「何があるんですか」

聞き返すと、壁の隅を指さす。そこに貼られた出前のメニューを見て、私は「カツ井」と答える。

黙々と箸を動かす私に、誰か話しかけている。顔を上げると、皆の視線が私に注がれている。高野がもう一度訊く。

「野末君は、今何年生なの？」

「二年生です」

「そうか。一番いい時だね。将来はどうするつもりなの？ やはり出版関係に就職するのかな」

「ええ——、どうするかしら。なるようになるでしょうけれど」

私はそのまま視線を井の中に落とすと、無愛想に箸を動かし始めた。高野はしつこく質問を続けるでもなく、すぐに他の人と話し始めた。三分の二ほど食べて箸を置